

今年の夏は、少し、ましだった

OWCC 中川和道 20251016

何を言うのだと叱られそうだ、こう書くと。そう、確かにあまりの酷暑だった。中川が言うのはそれではない。お盆の時期に毎年感じてきた「一抹の寂しさ」が今年は克服できた気がして、毎年に比べて今年の夏は自分には「少しましだった」というのだ。

夏至(今年は6月21日)を境に日照時間はどんどん短くなり、8月ともなると、猛暑に中にもアキアカネが現れ、暦の向こうに秋が控えているのを感じる。例年ならお盆のころには朝晩だけは気温が下がるようになる。中川の大学生時代には「梅雨明け10日間」(7月20日ごろ)が登山の本番だった(今の学生は違う)が、社会人の登山はお盆連休が本番で学生より1か月も遅かった。余談だが、冬の凍結・春の融雪・梅雨の長雨で緩みに緩んだ岩壁の浮石を大学生たちが落としてくれた後、社会人クライマーが滝谷や剣岳にやってくるという安全登山の時系列が成立していた。

岩登りトレーニングは梅雨明けから8月上旬までの短期集中だ。今年の梅雨明け6/27は異常に早かったので期間は少し延びたが、それでも、岩トレとボッカの集中は年寄りクライマーにはつらい。若者クライマーは室内壁を登るが、中川たち旧人類クライマーは、この時期に頑張っておけば「冬にカゼを引かない」と理由もなく信じていて、百丈岩や不動岩を登る。穂高や剣岳では25℃も気温が低いというのに、わざわざ酷暑の自然の岩場でクライミング手順や安全手順をトレーニングするのだから、ひどく矛盾に満ちた行動だ。若者からみたら水準低いお遊び程度なのだろうが、中川にとっては苦しい苦しいトレーニングだった。

中川がお盆は寂しいというのは、夏が逃げていく、とを感じるからだ。台風や大雨のためにお盆の山行が中止になった年は、とりわけ、その思いが募る。残り少なくなったクライマー人生の持ち時間のうち1年分を、こんなことで削られてたまるかい、こんなんでも今年の夏を終えてたまるかい、というくやしさ、あせりだ[文献1]。ところが、今年2025年は様子が違った。やるだけやった、という感じがあったのだ。

目指したのは滝谷出合いから滝谷第4尾根[文献2]。8月13日(晴)、中川和道-松田明博で入山した。13日は雄滝下部で幕営し14日に雄滝を跳び越し滝谷本谷とりつきをと目指した。ところが、折からの集中豪雨の直後とあって水流が極めて多く、14日になっても水量は減らず、地響き爆音とどろく雄滝を跳び越すことが、ついに、できなかった。敗退。

敗退したものの、もう10度目かという滝谷本体を自分の目で見られたのは、大きかった。何とか知恵をめぐらして、来年もまた、チャレンジしよう、という気持ちが湧いてきた。ぜひ、再会を・・・。

[文献1] 中川和道「終われ夏！ 剣岳南壁 A2 稜から山頂への初級アルパインクライミング」、大阪労山ニュース 2024 年 12 月号 p.28-32。 [文献2]中川和道、大阪労山ニュース 2025 年 9 月号、表紙裏の写真。